
月夜の夜にきみが僕に話したこと

海田 陽介

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

月夜の夜にきみが僕に話したこと

【Nコード】

N2669D

【作者名】

海田 陽介

【あらすじ】

フリーターをしながらプロのミュージシャンを目指している海上弘樹のとある日常を綴った話です。

第一話

待ち合わせ場所のサーティワンアイスクリーム前のベンチに腰かけた海上弘樹は、かじかんできた両手に息を吹きかけた。

寒い。十一月も半ばを過ぎ、いよいよ本格的な冬がやってきた気がする。

五分程もすると、中平勝生と東海林良美のふたりが並んで歩いてきた。何でも来る途中ではったり一緒にになったらしい。

中平勝生と東海林良美のふたりとは、二年程前でアルバイトをしていた喫茶店で知り合って仲良くなった。少し遅れて山本ゆかりと松田祥子のふたりもやってくる。彼女たちもやはり昔やっていた喫茶店のアルバイト先で知り合って親しくなった。

それぞれ年齢は異なるが、しかし、年齢の差なんてほとんど気にならないほど、このメンバーと一緒にいると、海上はリラックスすることができた。ちなみに、このメンバーのなかで一番の年長者は海上だ。

今日は定例の飲み会がある日だった。

アルバイトを辞めてからも、だいたい月に一度くらいこうやって集まってみんなで飲んでいる。海上は今まで様々なアルバイトをしてきたが、アルバイトを辞めてからも、今のようによく関係が続いたのは、これがはじめての経験だった。もしかすると、このメンバーとは一生の付き合いになったりするのかもしれないな、と、海上は考えたりする。

サーティワンアイスクリームのベンチ前であまり意味のない雑談を交わしたあと、海上たちは予約を入れておいた居酒屋へと向かった。

居酒屋での時間は穏やかに過ぎていった。みんな他愛もない話や、バカ話をして、それなりに盛り上がっているようだった。でも、今日の海上は気分が沈みがちで、上手くみんなの会話のなかに入っていくことができなかった。無理にテンションをあげても、途中ですぐ疲れてしまう。

諦めた海上は楽しそうに話しているみんなを傍観しながら、ひとりで黙ってソフトドリンクを飲んでいた。すると、黙っている海上を見て、退屈していると勘違いしたのか、中平が話しかけてきた。

「ウナッチは最近どうよ？」

と、あまり食べ物に手をつけていない海上に、中平は鳥のから揚げを進めながら話を振ってくる。中平は海上の二つ年下で、このメンバーのかなでは一番馬が合う。

「どうって？」

と、海上は中平に勧められた鳥のから揚げを箸で口のなかに入れながら質問の趣旨を尋ねた。

「どうって色々あるっしょ」

と、中平は酒を飲んでテンションがあがっているのか、変に明るい調子で尋ねてきた。

「たとえば、うーん、そうだね、タクシーをやめてからどうだとかさ」

海上は最近になってそれまで続けていたタクシーというバンドを辞めた。

海上の将来の目標は、プロのミュージシャンになることだ。タクシーというバンドを辞めたのは、べつにプロのミュージシャンになることを諦めたからではない。単純に方向性の違いが確定的になったからだ。他のバンドメンバーと自分の意見が頻繁に食い違っようになった。このまま無理にこのバンドでやっていくよりは、今のバンドを辞めてひとりで活動していった方が良いのではと思うようになった。だから、海上はバンドを辞めた。

「うーん。どうだろうね」

と、海上は中平の問に苦笑するように笑ってから、

「まだはじめたばかりだからね」

「でも、楽しいよ。バンド辞めて正解だったと思う。少なくとも今は自分の好きなように音楽できるからね」

そう言った海上の言葉は、半分本当で半分嘘だった。ときどきバンドを辞めたりせずに、あのまま活動を続けておけば良かったかな、思ったりすることがなくもない。

バンドメンバーに、その演奏が違つとか、甘えているとか、言いたい放題言われてたまに頭にくることもあったが、しかし、バンドを組んで活動していくメリットは、確かにあつたな、と、海上は今になってふと思ったりする。

なにより、ひとりで活動するようになった今では、演奏をしてくれるひとがいないので、以前のようにライブを行えないのが、辛い。みんなに自分の音楽を聞いてもらうチャンスが少なくなったように感じる。

それに、俺ももう二十七歳だ、と、海上は思う。海上は音楽に専念したいので今はアルバイトで生活をしているが、そういつまでも

こんな状態は続けていられないだろうと焦る気持ちもあった。

海上は今のこの自分の迷いや焦りをいつそのこと中平にぶちまけてしまいたいような衝動に駆られた。しかし、そんなことを言えば、せつかくの飲み会の席が湿っぽくなってしまふと思ひ、結局口にしたは何も言わなかった。

「逆に、ヒラツチはどうなの？」

と、海上はテーブルの上のもう残り少なくなってしまったウーロン茶を飲み干してしまつてから、中平に同じ質問をぶつけてみた。

中平は大学を卒業したあと、会社員をやっている。詳しく聞いたことがないので海上はよくわからなかったが、何でも環境に携わる仕事だという話だった。

「まあ、前よりはちよつと忙しくなつたかな」

と、中平は海上の問に少し考えてから答えた。

「やっぱり俺も今の会社に入って二年目だからね。それなりに仕事を任せられるようになって大変になつたことはなつたけど、でも、そのぶん仕事も面白くなつてきたのかな」

「へー。ちゃんと仕事してるんだ」

と、海上は感心して言つた。

「当たり前でしょ。ウナツチ、もしかして俺がいい加減に仕事してると思つてた？」

中平が笑いながら海上の科白に抗議してくる。

「いや、べつにそういうわけじゃないけどさ」

と、海上は笑つて答えると、向かいの席に座つた東海林良美の顔に視線を向けて、

「東海林さんはどう？」

と、同じ質問を振つてみた。

「えっ、わたし？」

と、良美は酔ったせいではおっとしていたのか、海上の質問にちよつと驚いたように答えると、

「うーん。どうだろう。大変なことは大変だけど、でも、最近はいぶ慣れてきたかな」

と、笑顔で答えた。

彼女は海上の三つ年下で、保険会社で働いている。仕事の内容は主にクレームの処理のようで、働きはじめたばかり頃は電話をかけた客があまりにも理不尽なことを言うらしく、よく辞めたいと漏らしていたが、最近はそのような苦情にも動じなくなってきたようで、それなりに楽しんで仕事をしているようだった。

「東海林は給料がいいもんな」

と、中平がからかうように言った。

「プチセレブ。プチセレブ」

「べつにプチセレブじゃないよ」

と、良美は中平の言葉を笑って否定した。

良美の働いている会社は大手の保険会社で、給料もいいようだった。海上はケータイ販売のアルバイトを週五日やっているが、良美の現在得ている収入には遠く及ばない。もちろん、ボーナスだってない。同じ時間働いてこつも収入が違うのかと啞然としてしまう。正社員か、と、海上は思う。俺もミュージシャンを目指すことなんて辞めて、どこか適当な会社に就職して働けばもうちよつと楽になれるのだろうか。海上は自分の感情のなかに、ふとそんな弱い想いが生まれてしまうのをどうすることもできなかった。

「山本さんと松田さんのふたりはどう？」

と、海上が自分の思考のなかに沈み込んでいる側で、今度は良美が海上がしたのと同じ質問をふたりに振った。

山本ゆかりと松田祥子のふたりは、今年短大を卒業したばかりで、今居るメンバーのなかでは一番年齢も若いし、社会に出てからの月日も浅い。

「朝早いし、先輩に気を使ったりすることが多くてそれなりに大変だけど」

山本ゆかりは幼稚園の先生をしている。以前話したときに、幼稚園は先輩後輩の上下関係がはっきりしていて大変だと彼女が漏らしていたことを海上はふと思いついた。

「でも、それなりに楽しんでやっています」

と、彼女は笑顔で続けた。

「それにめっちゃ子供がかわいくて」

そう言った彼女の顔はほんとうに子供がかわいくてたまらないといった様子だった。そんなゆかりの表情を見ているうちに、海上は彼女が自分の知らないあいだに、着実に社会人として成長しているんだな、と、思っただけで感じた。

「松田さんは？」

と、中平がシーザーサラダを食べている松田祥子に振った。松田祥子は食べることに集中していたらしく、中平の問に少しむせると、口元を手で隠しながら、

「はい。なんとか頑張ってますよ」

と、答えた。松田祥子は丸いでシヨップ店員をしている。

「色々規則とかうるさくてときどき辞めたくなったり、反抗したくなる時もあるけど、でも、なんとか続いていますね」

と、祥子は苦笑するように笑って答えた。でも、どこかその彼女の表情は、自信に満ちているようにも海上には感じられた。

みんなアルバイトを辞めてから色々妥協したり、苦勞したりしながらも、社会のなかになんとか自分の居場所を見つけて頑張っている

るんだな、と、海上はみんなを遠くに感じた。みんな成長していつているんだ、と、海上は思った。そして、自分だけがいつまでも同じ場所に留まり続けているように感じた。なんとかしなきゃ、と、海上は焦った。でも、具体的にどうすればいいのかわからなかった。ふいに、海上は意味もなく哀しくなった。心の奥底から何かを手を伸ばしてきて、海上の気持ちを力任せにその心の奥底に引きずり降りていくのを感じた。

もう、俺はどこへもいけないのかもれないな、と、海上はポツンと思った。そしてそう思った海上の言葉を、目に見えない誰かが小さな声で「そうだよ」と、肯定する声を海上は聞いたように感じた。

居酒屋をあとすると、まだ飲み足りないという話になって、もう一軒海上たちは居酒屋を梯子した。そしてその二件目の居酒屋も閉店時間となり、店を出たのは、もう明け方の四時過ぎだった。

始発電車が動き出すまでにはまだ少し時間があつたので、それまでの時間を潰すために海上たちは近くの公園まで移動することにした。

公園近くのコンビニに寄り、みんなのおのにおの飲み物やお菓子を購入する。海上は温かい缶コーヒーをひとつ買った。

訪れた公園は、もう冬で寒さが厳しいというのに、大学生くらいの人間が何組かいた。何を話しているのかまではわからなかったが、みんな大きな声でさわいだり、笑ったりして、楽しそうにしている

ようだった。悩み事なんて何も無いように思えた。海上は、そこで楽しそうに時間を過ごしている学生たちに過去の自分の姿を見たように思った。

海上も四、五年くらい前では悩みなんてなかった。それはもちろんどうやったらもつといい音楽を作れるだろうかといった悩みながらあったが、今のように自分の将来のことを考えて思い煩ったりすることなんてまずなかった。

自分の未来は希望に満ちているに違いないと無条件に信じる事ができた。

二十四歳くらいでインディーズデビューして、ファーストアルバムがじわじわと売れて、セカンドアルバムでメジャーデビュー。しかし、それが現実はどうだろう、と、海上は過去の自分の幼さが恥ずかしくなる。二十七歳になろうとしている今、自分はメジャーデビューどころか、インディーズデビューすらできていない。現実が厳しいということなんてわかっていたつもりだったけれど。

冷たい風が吹きぬけていき、周囲の足元に散らばった枯れ葉が乾いた音を立てて地面を転がっていった。海上は寒さで身体を丸めたふと、夜空に視線を向けると、空のだいぶ低い場所に月が見えている。小さな、物静かな光を放つ月だった。

海上は適当に空いているベンチに腰を下ろすと、缶コーヒートのプリングを開けて一口飲んだ。液体の甘さと温かさがじんわりと身体に広がっていく。

山本ゆかりが歩いてきて、海上のとなりに腰を下ろした。

「明日はバイトないんですか？」

と、ゆかりは口を開くと言った。

海上はゆかりの間に、あることはあるが、でも昼からの仕事だし、ちよつと眠ることもできるので問題ない、と、答えた。

「逆に山本さんは仕事大丈夫なの？」

と、海上は自分のとなりでペットボトルのお茶を飲んでいるゆかりに同じ質問を返した。

「あつ、明日は休みだから大丈夫です」

と、ゆかりは小さく笑って答えた。

「へー。明日は幼稚園休みなんだ」

と、海上は少し意外に思っけて頷いた。すると、ゆかりはちよつと可笑しそつに笑って、

「明日は日曜日ですよ」

と、忠告するように言った。

「そつか。今日つて日曜日だったんだ」

と、海上は答えて苦笑した。海上はアルバイトなので普段あまり今日が何曜日あるかということ意識することがない。

少しの沈黙があつて、その沈黙なかに、中平が何か言つて、良美と祥子のふたりが笑う声が聞こえた。

「今日は月がきれいですね」

と、しばらくしてからゆかりがふと思いついたように言った。

「そつだね」

と、海上は頷いて言った。海上は改めて夜空の隅の方に引つかつている月に注意を向けてみた。

「なんていうか、寒くなつてきたせいで空気が澄んでるのか、心なしか色んなものがきれい見える気がするよね」

と、海上は言った。

「海上さんつて案外ロマンチストですよね」

と、ゆかりは海上の科白に可笑しそつに微笑して言った。

「うん。俺つて基本的に究極のロマンチストだからね」

と、海上は答えると、冗談めかして少し笑った。それに誘われるようにしてゆかりも少し笑った。

弱い風が頬を撫でた。目の前の道を誰かが横切っていく。

「・・・そういえば、海上さんって昔わたしがライブ行ったとき、何か月がでてくる歌を歌ってませんでした？今日は月がきれいに見えててとかそういうの」

「よく覚えてるね」

と、海上はゆかりの科白に笑って答えた。その歌は「月の見える夜にきみが僕に語ったこと」という題名の歌だった。

「わたし、あの歌好きなんですよ」

と、ゆかりは微笑んで言った。

「あのライブのとき、百円で売ってたCD、わたし今でもよく聞いてますよ」

「へー」

海上は意外に思ってたゆかりの横顔に視線を向けた。そのCDというのは、三曲入りの、自主制作したものだ。

「あの歌って、友達のことについて歌った歌ですよね？」

「そうだよ」

と、海上はゆかりの質問に頷いて言った。

海上があるとき月を見ていると、ふいに海上は友達のことを思い出した。そしてその友達のことを考えながらもの十分程で、海上はその歌を作りあげてしまった。普段、曲作りにすごく時間のかかってしまう海上としては珍しいことだった。

「あの歌、いいですよね」

と、ゆかりは言った。声の感じからして、ゆかりが本気でそう思っているということが伝わってきた。

「そうかな？」

と、海上は少し照れ臭くなつて笑つて答えた。

「うん。すごくいいと思います。恋とか失恋の歌じゃなくて、純粹に友達のことを想つて、友達を大切していきたくってという想いが伝わってきていいなつて思います」

「ありがとうございます」

と、海上は笑つて礼を述べた。

「山本さんはいいひとだ」

「海上さんって近いうちにまたライブやる予定とかないんですか？」

「うーん、今のところないかな」

と、海上は答えた。

「またライブやることがあったらぜひ教えてくださいね」

と、ゆかりは微笑んで言った。

「だいたい夜には仕事終わってるし、行けると思うんでぜひ声をかけてください。またあの月の歌みたいないい歌作ってくださいね。

楽しみにしてるんで」

海上はゆかりの言葉にどう答えたらいいのかわからなかったので、曖昧に微笑しただけだった。それに、自分にはこれから先新しい曲を作るかどうか海上はいまひとつ自信がもてなかった。

と、海上がそんなことを思っていると、良美と祥子のふたりが急に慌てた声を出すのが聞こえた。どうしたのだろうと思ひ、海上が声の聞こえた方向に視線を向けてみると、どういうわけか、中平が大量の鼻血を出している。チョコレートでも食べ過ぎたのだろうか。やれやれと思ひながら、海上は中平の介抱をしている良美と祥子のふたりを手伝うためにベンチから立ち上がった。

月夜の夜にきみが僕に話したこと

第二話

その日、アルバイトを終えて店を出たのは、夜の九時過ぎだった。

今日は日曜日だということもあって店は忙しかった。それに付け加えてイレギュラー的な問題がしばしば発生して、責任者である海上は休暇を取っている店長に確認の電話を入れたりと対応に追われて必要以上に消耗した。

今日はもうぐったりと疲れ切っていてすぐにでも家に帰りたい気分だったが、日曜日である今日はスタジオに練習の予約をいれておいたのでいかなければならなかった。キャンセルすることもできないのではないのだが、そうすると、キャンセル料を取られることになる。

スタジオに入ると、海上は早速練習に取り掛かった。やはりスタジオだけあって思い切り大きな音で演奏できるし、歌も歌えるのでいいなと感じる。

海上はこれまで自分が作ってきたオリジナル曲を一通り練習したあと、この前公園で山本ゆかりが言っていた言葉をふと思い出して、新曲作り挑戦してみることにした。考えてみると、ここしばらく新しい曲なんてひとつも作っていない。

海上の場合、曲を作るときはいつも大抵即興でギターを弾きながら作っていく。でたらめに思いつくままにギターを弾いていると、たまにこれだと思うようなメロディーが浮かんでくることがある。海上の場合、その偶然浮かびあがってきたメロディーを徐々に発展させていって、ひとつの曲を作るといった感じだ。そしてメロディーが出来上がってしまったからあとで歌詞をつける。たまにそれが逆

になることもある。

海上はしばらくのあいだ新曲を作ろうとギターをかき鳴らしてみ
たが、結局、全ては徒労に終わってしまった。ギターの音は頭のな
かを上滑りしていく。ギターを弾いているうちに、でたらめな音の
羅列が少しずつ纏まった形になっていくということがない。音が像
を結んでいかない。

海上は諦めてギターを置いた。そして曲を作ることができないの
であれば、せめて歌詞だけでも書こうと思った。大学ノートを開き、
ボールペンを持つ。

しかし、これもだめだった。一瞬、いい言葉が浮かんだと思つて
それをノートに書き写してみても、しばらくすると、それがなんだ
か安っぽい言葉のように思えてきてしまう。仮に何行か書き進める
ことができたとしても、そこから先の言葉が、ぶつん音が途切れて
しまったように、何も浮かんでこなくなってしまう。暗闇のなかを
彷徨っていて、やっと出口を見つけた思い、ドアを開けて階段を下
りていくと、途中でその階段がなくなってしまうという感じ
だ。

海上は妙に暗い気持ちになって広げていた大学ノートを閉じた。
それから目を閉じる。スタジオのなかにいるので目を閉じてもそれ
ほど目の前が真っ暗になることはないはずなのに、そのとき目を閉
じた瞼の裏側には、奇妙に濃度の高い暗闇が広がっているように海
上には感じられた。

練習を終えてアパートに戻ったのは、もう十二時近くだった。

西田直美は、2DKのアパートの、寝室として使用している部屋でもう眠っていた。

直美とは付き合ってから六年目になる。そして同棲するようになってからは四年の歳月が流れている。

直美は海上よりもふたつ年上なので現在二十九歳だ。彼女は現在ロフトで派遣社員として働いている。

もう付き合ってから長いし、できることなら彼女と結婚したいと思うのだが、しかし、いかんせん、海上は明日どうなるかわからないフリーターの身なので今はとても結婚することなどできない。彼女も来年は三十歳だし、早く結婚したいだろうなと思うと、海上は申し訳ない気持ちで一杯になる。彼女のためにも、あえて自分は直美と別れた方がいいのかもしれないと最近は考えたりすることもある。

海上は彼女を起こさないようにそつと部屋を移動すると、もうひとつのリビングとして使っている部屋に移動した。

とりあえずという感じで風呂に入る。風呂からあがると海上はテレビをつけた。

テレビでは夜のニュースがやっていた。ニュースでは相変わらず明るい話題よりも暗い話題の方が多かった。どこかの遠い国では自爆テロが多発していて、今のところそれを防ぐ有効な手立ては見つかっていないようだった。日本では有名な国会議員が汚職で捕まり、どこかの小さな町では殺人事件が起っていた。特集として、ネット

カフェ難民と呼ばれる低所得者たちの悲惨な現状が報道されていた。

テレビを見ていると、もうどこにも希望なんてないような暗い気持ちになってくる。海上はうんざりした気持ちになってつけていたテレビを消した。

気分転換に音楽でも聴こうと思い、最近買ったばかりのCDをCDプレイヤーのなかに入れ、ヘッドホンで聴く。でも、その音楽を聞いていても少しも音楽に気持ちを集中することができないどころか、ただうるさく感じるだけだった。

海上は音楽を聴くこともやめた。

何もやりたいと思うことがなくなってしまった。

部屋のなかは奇妙にしんとして静まり返っていて、息苦しく感じられるくらいだった。六畳一間の空間が、自分の方に向かってぎゅっと収縮してくるような圧迫感に襲われる。

海上は諦めて消していたテレビをつけた。テレビでは夜のニュースが終わり、何かのバラエティ番組がはじまったところだった。テレビから賑やかな笑い声が聞こえてくる。

と、そのとき、海上の居る部屋のドアが唐突に開いた。見てみると、直美が眠そうな顔で立っている。

「ごめん。起こしちゃった？」

海上は直美の顔を見て言った。すると、直美は眠そうな顔で首を振り、

「ちよつと喉が渴いちゃって」

と、ぼんやりとした口調で答えた。

彼女はそのまま台所の方へ歩いていくと、冷蔵庫から麦茶を取り出して、コップに注ぎ、一息に飲み干した。寝室として使っている部屋から台所にいくためには海上の居る部屋を通らなければならぬ。

直美は麦茶を元通り冷蔵庫のなかに戻すと、また海上の居る部屋まで戻ってきて、海上のとなりあたりに腰を下ろした。そして焦点の定まらない視線をなんとなくテレビ画面に向けながら、

「今、帰ってきたの？」

と、尋ねてきた。

海上は彼女の間に短く頷いた。

「練習してたの？」

海上はそうだというように頷いた。

「最近調子はどう？」

「あんまりよくないね」

と、海上は答えた。

「そっか」

と、直美はどう言ったらいいのかわからない様子で曖昧に頷いた。沈黙があつて、少しのあいだ、テレビの音声が狭い部屋に溢れた。

「明日仕事は？」

と、今度は海上の方から訊ねてみた。

「九時から。だから明日は七時起き」

直美は海上の間にそう答えると、眠そうにあくびをひとつした。起きてていいの？」

と、海上がちょっと心配になつて言うと、

「大丈夫。今日帰ってきてからすぐ眠つたから」

と、直美は微笑して答えた。

「そっか」

と、海上はただ頷いた。

「来週ね」

と、何秒間か黙っていてから直美はふと思いついたように口を開いた。

「うん」

と、海上は相槌を打った。

「友達の結婚式があつて、だからちょっと行ってくるね。その日は友達の家に泊まることになると思うから」

海上は彼女の科白にわかったと頷いた。そしてそれから海上は、

「なんかごめん」

と、短く謝った。

「何が？」

と、海上の言葉に、直美は振り向いて少し可笑しそうに口角をあげる。

「いや、ほんとうだったらさ、直美も結婚とかしたいだろうなと思つてさ」

海上がちょっと照れ臭くなって濁すように答えると、直美は少し笑つて、

「もしかしてわたしが結婚式の話なんてしたから？」

と、からかうような口調で言った。それから、彼女は急に真面目な表情に戻ると、

「そんなことだったら気にしなくて大丈夫だよ」

と、優しい口調で言った。

「わたしはべつに早く結婚することにこだわってるわけじゃないし直美は続けてそう言つと、微笑んで、

「そんなこと考えてる暇があつたら、頑張つていい音楽作つてよ。

そして早くデビューしてよ」

と、言った。

「そうだね」

と、海上は彼女の言葉に苦笑するように笑って頷いた。直美の言葉は、単純に海上にはありがたく感じられた。

それから、海上は、直美が麦茶を飲むところを目にしたせいなのか、急に喉の渴きを覚えた。海上はそれまで座っていた床から立ち上がると、台所まで歩いていき、冷蔵庫から麦茶を取り出すと、それをグラスに注いで直美のときと同じように一息で飲み干した。

ふと台所の窓の外に目を向けると、そこには月が見えていた。それは上の箇所がほんの少し欠けた、淡い黄色の、優しい光を放つ月だった。

第三話

それから、いつも通り、なんとなく毎日は過ぎていった。アルバイトに行き、たまにスタジオで練習し、家に帰ってから本を読んだり、好きなCDを聴いたりする。特に幸せでも、不幸せでもない毎日。

ゆかりに言われてから海上は諦めずに新曲作りに取り組み続けたけれど、なかなか思うようにははかどらなかつた。このさき、もう自分は新しい曲なんて作ることができないんじゃないか、と、だんだん絶望的な気持ちになってくる。

海上の音楽に対する苛立ちはちよつとずつ海上自身の心のなかに蓄積されていき、やがて限界まで蓄積されたそれは行き場を失って、海上の感情のなかで腐りはじめる。

そのとき、海上は信号待ちをしていた。でも、どういうわけか、いつまでも待つても信号は赤のままだった。車の往来は激しく、信号を無視して渡ってしまうこともできない。

海上はだんだん苛立ってきた。特にどうしても早くに家に帰らなければならぬ用事があるわけでもないのだが、寒空のなか、無意味にこうして待たされるのは苦痛以外の何物でもなかつた。それに今日レンタルショップでDVDを借りて帰ろうとして、以前借りていたDVDが未返却になっていることが判明し、結局その借りたかったDVDを借りることができなかつたということも、いまの海上の苛立ちに拍車をかけていた。

DVDが未返却になっているのも、そのせいで借りたかったDVDを借りることができないのも、完全に自業自得なのだけれど、しかし、そうとわかっていても、海上は苛立ちを押さえることができなかった。

こんなことくらいでイライラしているなんて馬鹿馬鹿しいし、無意味だと思ったけれど、海上は我慢できないほどの怒りが込みあげてくるのを感じた。世の中のありとあらゆることが、自分のことをバカにして、コケにしているように感じられた。

曲作りが上手く進まないせいか、普段であればなんとも思わないことが、必要以上に腹立しく感じられてしまう。

海上はムシャクシャしてきて、側にあつた電柱を思い切り足で蹴っ飛ばした。

すると、足に猛烈な痛みが走った。

しかも、変な態勢で電柱を蹴ったりしたものだから、バランスを崩して、持っていた自転車ごと派手に転んでしまう。

泣きそうになった。

側で海上のことを見ている人間がいなかったのがせめてもの救いだったが、海上は惨めで、情けない気持ちで一杯になった。

俺はこんなところで一体何をしているのだろう、と、海上は思った。もう二十七歳で、フリーターで、未だにほんの小さな結果さえ出せずにいる。このさき生きていてもいいことなんて何も無いんじゃないか、と海上は大袈裟に哀しくなった。

心のなかの、鬱屈した感情がごちゃ混ぜになって眠っている、粘液質な液体で満たされた黒い沼から、何か絶望にも似た激しい感情が、黒い気泡となって浮かびあがってきて海上の意識のなかで弾けた。

もう、死んでしまってもいいかな、と、ふいに海上は投げやりな気持ちになってしまった。

まるで自分のまわりから音が消えていくように、心に力が入らなくなつた。何も考えられなくなつた。

ふと気がつくと、無意識のうちに、海上は足を踏み出していた。目の前の道に向かつて。

信号は赤のまま、六車線ある道路をたくさん車がかなりのスピードで走り過ぎて行く。

しかし、海上は構わずに足を前へと運び続けた。

と、そのとき、近くで何かけたたましい音が聞こえた。

なんだろうと思うと、それは車のクラクションだった。

気がつくと、海上はあともう少しで、車の往来の激しい道路のなかに完全に足を踏みこもうとしていた。海上の存在に気がついた車が、際どいところでよけていく。

一体自分は何をしようとしていたのだろうかとう海上は思った。バカ

らしい。

我に返った海上は慌ててもとの歩道まで小走りで戻った。

何気なく、となりの電柱を見てみると、目の前の横断歩道は押しボタン式になっている。

やれやれ、と、海上は思った。どうも疲れているみたいだ。ため息をつく、それはため息の形に白く煙った。

改めて押したボタンを押と、信号は拍子抜けするほどあっさりと赤から青へ変わった。

第四話

「でもさ、ウナツチは恵まれてる方だと思っけどな」

と、中平はもう残り少なくなつた紅茶を口元に運びながら言った。

海上と中平はサンマルクカフェにふたりでいる。仕事が早く終わつたらしい中平が、海上に電話をかけてきて、暇だったら一緒に喫茶でもしないかと誘ってきたのだ。海上も特にその日は用事が何もない日だったのですぐに中平の誘いに応じた。

「だって、俺なんて特に何もやりたいことなんてねえもん」

と、中平は笑って言った。

サンマルクカフェでくだらない雑談をしているうちに、いつの間にか話題は、海上の音楽に関する話になった。気がつくと、海上は自分の悩みを適度に冗談で誤魔化しながら中平に話して聞かせていた。こんなふうにくちぐち悩むくらいなら、いつそのこと、自分は最初から音楽なんてやっていなければよかったのかな、と。

「俺には言わせれば、ウナツチは贅沢だと思っけどな」

と、中平は言葉を続けて言った。

「世の中には自分が何をやりたいのかわかなくて、なんとなく働いているやつばかりなのにさ、そんななかでウナツチははっきりとした目標があるんだから、俺は恵まれてると思っよ」

海上は中平の科白に曖昧に頷くと、コーヒーカップを口元に運んだ。しかし、それはいつの間にか空になってしまっていた。海上はコーヒーカップをもとのソーサーの上に戻すと、胸ポケットからタバコの箱を取り出して、そこからタバコを一本取り出して口にくわ

えた。

「俺は今の会社に就職して二年目だけど、正直、楽しいかって訊かれたら、べつに楽しくはねえもん。まあ、やっていくうちにちよつとずつ慣れてくるし、責任ある仕事を任せられたりして、やりがいを感じたりすることがなくもないけど、でも、ほんとうの意味で充実してるかって言ったらそうじゃないからね。」

やっぱり上から指示されて動いてるだけだし、色々と面倒くせえ規則とかあるしさ・俺の場合、基本にお金がないと生活していけないから、働いているだけだからね。だから、そういう意味ではウナッチはうらやましいと思うよ。やりたことがあって。俺もなんかそういうのあったらいいなって思うけど、なんもないからね」

海上は「なるほどね」と、中平の言葉に頷くと、くわえていたタバコにライターで火をつけた。深く煙を吸い込んで吐き出す。

確かに中平のような意見もあるのだろうな、と、海上は思った。でも、そのやりたいことよってかえって足をひっぱられている人間はどうすればいいのだろうと海上は一方で思ったりする。

なかなか結果を出せずに、かえってそのやりたいことで追い詰められていってしまうような人間は。むしろやりたいことなんて何もなく、適当なところで妥協して、適当に生きていける人間のほうが幸せなんじゃないかと思えたりもする。

そんな海上の考えを見透かしたかのように、中平は言葉を続けて言った。

海上が斉藤英樹とばったり再会したのは、海上が休日で街を特に用事もなく歩いていたときだった。

海上がロフトで珍しいデザインの椅子に見とれていると、背後から声をかけられた。海上がちょっと驚いて振り向くと、そこには斉藤英樹が立っていた。斉藤英樹は海上が昔ヒザヤでアルバイトをしていたときに知り合った人間だ。

斉藤はサラリーマン風のスーツ姿で、髪型をきれいに七三わけにしていた。

「久しぶりじゃん」

と、斉藤は笑顔で言った。

「そうだね」

と、海上は曖昧に頷いた。

海上は、斉藤という男がどちらかというところ好きではなかった。

これは海上の偏見かもしれないのだが、斉藤という男はだいたい自分の話しかしないし、ヒザヤでアルバイトをしているときも自分のことは棚にあげて、バイト仲間の気に入らない人間の必要以上で悪く言う傾向があった。

また自分がミスをしたときには反省せずに、すぐに他人のせいにする。だから、海上はヒザヤのアルバイトを辞めてから斉藤とは全く連絡を取っていなかった。

「なにしてんの？」

と、斉藤は自分が嫌われていることなど全く気がつかない様子で気安い口調で話しかけてきた。

「いや、今日バイト休みだから、ブラブラしてるんだけど」

海上がそう答えると、

「お前、まだバイトやってんだ」

と、斉藤はバカにしたように半分笑って言った。

「じゃあ、なに？まだ音楽やってんだ？」

海上が苛立ちを押さええて我慢強く頷くと、斉藤は口元になやついた微笑を浮かべて、

「自由でいいねえ」

と、見下したように言った。

「まあね」

と、海上は答えると、

「斉藤は今なにやってんの？」

と、訊ねてみた。斉藤は海上と一緒にアルバイトをしていたときは、海上と同じようにバンドをやっていた。一度どうしても誘われて斉藤の組んでいるバンドのライブを見に行ったことがあるが、砂糖菓子のように甘いラブソングのろくでもない音楽だったことが印象に残っている。

「俺？俺は見てごらんの通り、立派な社会人よ。カメラの営業やってんだだけさ、どうせ営業なんてやってもやらなくてもあんま変わらないからこうしてサボッてんの」

斉藤はそう言うと、何が可笑しいのか愉快そうに笑った。

それから海上は斉藤に誘われて近くにあるドールコーヒーに行った。ほんとうは斉藤と一緒にお茶なんてしたくなかったのだが、断るのも面倒だったのだ。

斉藤は社会人だからと言って、海上が断っても無理に海上のぶんのコーヒー代も払ってくれた。

海上と斉藤は奥のテーブル席に向かい合わせに腰を下ろした。

「斉藤はじゃあもう音楽辞めちゃったんだ？」

と、海上は特にどうしても知りたいというわけでもなかったのだが、話すことも思いつかなかったのでなんとなく訊ねてみた。

すると、斉藤はコーヒーを口元に運びながら頷いた。

「もう、あんなの特に辞めちゃったよ」

と、斉藤はバカバカしいといったように微笑しながら答えた。

「いつまでも青春先延ばししてらんねえしさ」

「ふうん」

と、海上は斉藤の言葉に頷いた。それから、

「いつ辞めたの？」

と、これもまた特にどうしても知りたいというわけでもなかったのだが、つい反射的に尋ねてしまった。

「さあ」

と、斉藤は海上の言葉に軽く首を傾げると、

「お前がピザヤ辞めてから一年くらいしてからだから、三、四年前じゃねえの」

と、どうでも良さそうに答えた。それから、斉藤はコーヒーカップをもとのソーサーのうえに戻すと、ポケットからタバコを取り出して口にくわえて火をつけた。そして口から上手そうに煙を吐き出

しながら、

「海上もそろそろ将来のこと真剣に考えた方がいいんじゃないかねえの？」
と、諭すように言った。

「お前、俺とタメだからもう二十七だろ？もうすぐ三十だぜ？どうすんだよ？三十過ぎてから雇ってくれるような会社なんてそうそう見つからないぜ」

海上は斉藤の言葉にそんなことはわかっていると答えた。すると、斉藤は失笑するように小さく笑って、いやわかってないねと続けて言った。

「お前は甘えてるんだよ」
と、斉藤は言った。

「いつまで叶わない夢にしがみついているんだよ。もっと現実を見ろよ。二十七にもなつてデビューできてないってことは才能なんてなかったってことなんだよ。それくらい自分でわかるだろ？辛いかもしれないけど、ちゃんと現実を見ろよ。もっと大人になれって」

海上はどうして自分がこんな男に説教されなきゃいけないんだと腹が立ったが、しかし、斉藤の言っていることはいちいちもつとだったので返す言葉が見つからなかった。確かに自分は甘えているし、叶わない夢にしがみついているだけなのかもしれない。もっと大人になるべきなのかもしれない。

海上は斉藤の言葉にそうかしもれないな、と、答えた。

斉藤は海上を言い負かしたと思って満足したのか、今度はいたわるように微笑すると、

「お前も、就職しろよ」

と、優しい口調で言った。

「社会人だつて悪くねえつて。そりゃあ、義務とか目標とか色々面倒くせえこともあるけどさ、毎月決まった額の給料もらえるし、ボーナスだつてあるんだぜ。好きなもの買えるよ。俺も就職してみてはじめてわかつたんだけどさ、どうして俺はあんなに苦労してまで叶わない夢にしがみついてたんだろつて思うよ。お前も就職すれば楽になれるよ。な」

斉藤はそれだけ言うと、腕時計に視線を走らせ、それまで座っていた椅子から立ち上がった。コーヒーにはまだ半分も手をつけていない。

「じゃあ、そろそろ、俺、会社に戻らないといけない時間だからいくわ」

斉藤は申し訳なさそうに言った。海上にしてみれば願ったり叶ったりだったのだが、そんなことは口に出して言えるはずもない。

「コーヒーは適当に片付けておいてよ」

斉藤はテーブルの上のコーヒーを顎で示してから言った。

海上は黙って頷いた。

それから斉藤はへらへらバカにしたような微笑を浮かべながらじやあなと言つと、海上に背を向けて歩いていこうとした。が、何かを思い出したのか、急に立ち止まって海上の方を振り返ると、胸ポケットに手を伸ばして財布を取り出すと、なかから一枚の紙を取り出して、それを海上に手渡した。

海上が手渡された一枚の紙片を見ていると、

「それ、俺の名刺。なんかあったら連絡してくれよ」

と、斉藤は言った。

「俺、社長と結構仲いいし、お前のこと紹介してあげられるかもよ」

月夜の夜にきみが僕に話したこと

齊藤は微笑んで言った。そしてそれだけ言つと、また改めてじゃあなと言い、背中を向けて歩いていった。

海上は齊藤の姿が見えなくなってしまうと、もらった名刺をすぐに破いて捨てた。

第五話

直美と口論になってしまったのは、海上がアパートに帰宅したその日の夜だった。

切っ掛は些細なことだった。

海上がフローリングの床の上に出しっぱなしにしておいたCDを、直美が誤って踏んで割ってしまったのだ。

直美は海上に謝罪すると、必ず明日新しいものを買って返すからとまで言ってくれた。

いつもの海上であればそれくらいことで怒ったりはしなかった。多少とムツとしたりはしたかもしれないが、それくらいのことでは真剣に腹を立てることはまずなかった。それに、もともとわかりづらい場所にCDを放置しておいた海上も悪かったのだ。

でも、その日は斉藤のこともあって、海上は機嫌が悪かった。つい感情的になって、必要以上に直美のことを責めてしまった。

気がついたときには口論になっていた。

物別れが決定的になってしまったのは、直美が口にした科白だった。

直美が海上に対して、あなたの音楽のせいで自分がどれだけ辛い思いをし、なおかつ色んなことを我慢しているかと難詰したのだ。いつまでもくだらない音楽なんてやっていないで就職したらどうな

んだ、と。

斉藤のこともあって、就職という言葉に過敏になっていた海上は、激昂して、そんなふうに思うのであれば俺と別れればいいだろうと怒鳴ってしまった。怒鳴ってしまったから、海上は少し言いすぎたかな、と、反省したのだが、そのときには既に遅かった。

怒った直美は無表情にわかったとだけ言うと、着ていた服のうえからコートだけはおると、鞆を持って、家から出て行ってしまった。

海上も今更ひくにひけなくなってしまう、家から出て行く直美をそのままにしてしまった。テレビをつけると、見たくもないテレビ番組を黙って眺めていた。

海上がいくら冷静さを取り戻したのは、直美が出て行ってしまったから一時間以上が経過してからだ。海上はついさっきまでそこに直美のコートがかかっていたはずのハンガーを見つめながら、これまでも何度も喧嘩はしてきたけれど、今回はもうだめかもしれないな、と、妙に冷静な気持ちで思った。

でも、むしろ、これで良かったのかもしれない、と、海上は自身に言い聞かせるように思った。自分にとっても。直美にとっても。

直美が部屋を出て行くときにちゃんとドアをしめていかなかったらしく、ドアから隙間風が入ってきて寒かったので、海上はフロアリングの床のうえから立ち上がると歩いていって部屋のドアを閉めた。

部屋のドアを閉めると、ガチャンと思ったよりも大きな音が部屋に響いた。そしてドアを閉めた瞬間に、海上はもう後戻りすることができないくらいに何かが決定的に、酷く、損なわれてしまったことを悟った。

三日経っても直美は戻ってこなかった。今まであればどんなに派手な喧嘩をしてもいつも大抵二日目には戻ってきていた。

これはいよいよもうほんとうに駄目かもしれないな、と、海上は覚悟した。お互いのためにも別れ方がいいのかもしれないと思いいながら、やはり海上は直美に対して未練の気持ちがあつたし、できることなら別れたくはなかった。

でも、意地もあつて、海上の方から直美に連絡を取ることはしなかった。

このまま連絡を取らないことで彼女と別れることになってしまうのであれば、それはそれで仕方がないのかもしれない、と、海上は自分自身に言い聞かせた。

喧嘩してから四日目の日、海上はその日、バイトも何も予定のない日だったので、いつ直美が戻ってきてもいいようにと一日部屋で待機していることにした。

柄にもなく、部屋の掃除を試みたりもした。

しかし、朝が過ぎ、昼が過ぎ、夕方が過ぎようとしても、直美が戻ってくる気配はなかった。

海上がもうだめだな、と、諦めかけた頃、唐突にケータイ電話の着信音が鳴った。

もしかして直美からの電話かと思い、慌てて海上が電話に出ると、それは直美からの電話ではなく、母親からの電話だった。

「どうしたの？」

と、海上が電話に出ると、母親は緊迫した口調で、落ち着いて聞きなさいよ、と、諭すように言った。

母親の科白に、海上が思わず警戒すると、母親は、
「今朝、柏原くんが亡くなったって」

と、唐突に言った。

あまりのことに、海上が言葉を失っていると、母親は続けて言った。

「さっき、柏原くんのお母さんから連絡があったの」

と、母親は言った。

海上は黙っていた。何をどう言ったらいいのかわからなかったのだ。

「ちょっと聞いているの？」

と、海上が黙っていると、母親は苛立ったように言った。
聞いているよ、と、海上は答えた。

「今日がおつやで、明日がお葬式だから、明日、朝、こつちに帰ってきなさいね」

と、母親は言った。

月夜の夜にきみが僕に話したこと

海上の実家があるのは千葉だ。

海上はわかったと答えて電話を切った。

思考が麻痺してしまったように何も考えられなくなった。

第六話

柏原祐樹は海上の小学校のときからの幼馴染だ。家が近所だったということもあって小さな頃はよくお互いの家を行き来して遊んだり、お互いの家の親が仲が良かったこともあって、ときには泊りだけで遊んだりすることも珍しくなかった。

柏原祐樹が病気になったのは、小学校五年生のときだった。そのとき海上は柏原と同じクラスだったが、ある日を境に、突然柏原は学校にこなくなってしまった。

しばらくしてから学校の先生から説明があり、柏原が現在に脳に腫瘍ができるという難病にかかっている病院に入院していることと、後日、その脳にできた腫瘍を取り除くための難しい手術が行われる予定だということが伝えられた。

柏原の手術が無事成功するようにとクラスのみんなで千羽鶴を作り、それを海上も含めたクラスの代表何人かで柏原の入院している病院まで届けにいった。

病院に行くと、柏原は脳にできた腫瘍のためかあまり自覚症状がないらしく、明るく、元気そうにしていた。まだ幼かった海上はもしかすると柏原は仮病をつかってズル休みをしているだけなんじゃないかと疑わしく思ってしまったほどだった。

その日は早く元気になってねといった励ましの言葉をかけて海上たちは病院をあとにした。

それから一週間後くらいに手術は行われ、手術はなんとか無事に成功した。しかし、脳にできた腫瘍を取り除く手術のため、柏原には少し障害が残った。

手術の終わった二週間後くらいに海上は両親と伴に柏原の入院している病院に見舞いに行ったのだが、そのとき、柏原は手術の後遺症のせいで全く言葉がしゃべれなくなってしまっていた。

海上が話しかけると、柏原は口をあけて何か喋ろうとするのだが、それがあーとかうーといった意味のない声にしかない。

海上はそのときになってはじめて、柏原という友人が重い病気にかかってしまったのだということを理解した。

柏原が学校に復学したのは、それから三ヶ月くらいが経過してからのことだった。

柏原はどうか言葉が喋れるようになるまでには回復したみたいだった。

が、しかし、以前と全く同じというわけにはいかないようだった。聞いているこちらがもどかしくなるような非常にゆっくりとした速度でしか柏原は言葉を話すことができなくなってしまった。それ加えて柏原は以前に比べて圧倒的に体力が低下した。

柏原は以前は運動場を走り回るような活発な子供だったのだが、病院から帰ってきてからは激しい運動ができなくなり、体育の時間のほとんどをみんなから離れた場所で見学するようになった。

海上は友人のあまりの変わりように驚いたし、ひよつとすると、柏原はこのまま死んでしまうんじゃないかと心配になった。というのも、両親があの子はあまり長くは生きられないかもしれないと柏原のことを深刻な顔をして噂話をしているのを海上は偶然に耳にしてしまったからだ。

海上は柏原が死んでしまうなんて冗談じゃないと思ったし、柏原が一刻も早く、以前と同じように本格的に回復することを願わずにはいられなかった。

しかし、海上のそんな願いも虚しく、柏原の容態が本格的に回復することはなかった。相変わらず柏原はゆっくりとした速度でしか言葉を話すことができなかったし、以前のように運動することもできなかった。それどころか、体調を崩しやすくなり、学校を休みがちになった。

しかし、それでもどうにか柏原はなんとか無事小学校を卒業し、小学校を卒業すると、海上と同じ中学校に入学した。

中学校に入ると、柏原の事情をよく知らない人間が、柏原のことをばかにしたり、からかったりするようになった。柏原は手術の後遺症のせいで相変わらずゆっくりとした速度でしか喋ることができなかったのだが、誰かがわざとその柏原の喋り方を真似てみんなで笑ったりするのだ。

海上はそんな現場にでくわすたびに柏原のことをかばってやったが、しかし、それにも限界があった。海上の知らないところで柏原のことをバカにしたり、あざけったりする人間があとを絶つことはなかった。

もし、自分が柏原の立場だったら辛いだろうな、と、海上は思った。その頃海上は思春期特有の悩みなのか、生きることの意味や将来のことについて思い悩むことがよくあった。

だから柏原の心境を思うと、いたたまれない気持ちになった。なりたくもない病気にかかり、言葉が不自由になり、以前のように思い通りに身体を動かすことができなくなった。それがこのうえどうして同級生から不当にバカにされたり、からかわれたりしなければならぬのだろう。

もし自分が柏原の立場だったら、きつと死にたくなっただはすだと海上は思った。きつとこの世界のありとあらゆることが憎くて憎くてしょうがなくなっただろうと思った。しかし、それにも関わらず、不思議と柏原がふさぎこんだり、暗くなったりすることはなかった。海上が話しかけると、柏原は明るい微笑を浮かべてゆっくりとながらも楽しそうに話をし、ときには冗談を言ったりもした。

海上は一度だけ、柏原と生きることの意味について話をしたことがある。確か中間テストか何かの関係で学校が早く終わり、途中まで一緒に歩いて帰ったときのことだ。

海上が柏原に生きていて辛くなったり、死にたくなったりすることはないのかと尋ねると、柏原は穏やかに笑ってそんなことはないかと答えた。

海上はその当時バスケットボール部に入っていたのだが、どれだけ一生懸命練習しても、なかなかレギュラーになれず、一方でろくすっぽ練習にもてでないような部員があっさりレギュラーにな

れてしまったりすることがあった。そういうとき、海上は理不尽なものを感ぜずにはいられなかった。

また勉強に関してもそういういこうを感じることがしばしばあった。海上がどんなに頑張っても勉強しても、大して勉強もしていない人間にあっさり負けてしまうことがある。

結局、全てのことは、そのひとがもともと持っている素質や才能によって大きく左右されてしまう。努力が報われることは少ないし、願いは叶わない。この世界はなんて理不尽にできているのだろうと海上はよく思った。

海上がそう言うのと、でも、そういうった、ときに虚しかったり、厳しかったりする人生のなかで、色んなことを感じて、考えて学んでいくことに、きっと生きる意味はあるのだろうと思うと柏原は答えた。

人生とはたぶん何かを学ぶためにあるのであって、何かを勝ち得たり、結果を出すためにあるのではないと思う、と。だから、たとえ苦しくてもその苦しみのなかで必死にもがいて、自分にできることを精一杯やればそれで十分なのだ、と。

もちろん、柏原が理論整然とそんなふうには語ったわけではないのだが、要約すると、柏原が海上に話したことはだいたいそのような意味になった。

そのときの海上には柏原の語ったことは高尚過ぎて全てことをそのまま額縁通りに受け入れることはできなかった。やはり海上にしてみれば結果が出せなければ全ては無駄のように思えてしまうし、

人生とは幸福になるためにあるのだという考えがあった。しかし、それでも、なるほどな、と考えさせられる部分はあった。

少なくとも柏原の語った、人生とは自分にできることを精一杯やればそれで十分なのだという考え方には、救われるものがあった。結果がだせなくても、幸せでなくても、それでもそこには救いがあるのだ、と。

その当時、まだ十四歳か十五歳に過ぎなかったのに、柏原は変に老成してしまっているところがあった。たぶん幼い頃に重い病気をし、ひとよりも何倍も辛い思いしたことが、柏原の心を普通のひとの何倍も早い速度で成長させたのだろうと海上は今になって思う。

その後、海上は中学校を卒業すると、地元の進学校に進学し、柏原は学力や言葉の問題もあって、職業訓練学校のようなところに進学した。

しかし、柏原はその職業訓練学校に進学してから間もなく体調を崩しやすくなり、頻繁に病院の入退院を繰り返すようになった。

そして海上が高校を卒業する頃くらいには、柏原はほとんどの時間を病院で過ごすようになってしまった。

第七話

柏原はその頃にしては珍しく体調が良く、病院を一時退院して実家に帰ってきていた。

柏原が実家に帰ってきているという話を聞いた海上は、久しぶりに柏原の家を訪ねていった。柏原の実家を訪ねていったのは、柏原にちよつと報告しておきたいことがあつたからだ。

海上は高校を卒業したあと、地元にある私立の大学に進学したのだが、どうしてもそこでの生活に馴染むことができずにいた。そこで学ぶ全てのことが無駄なことのように思えてしまつて仕方がなかつた。

それにその頃、海上は高校のときに友達に誘われてはじめたバンドにのめりこむようになっていて、このまま大学でやりたくもない勉強を続けるよりは、大学を辞めて本格的にプロのミュージシャンを目指したいという気持ちが抑えきれなくなつてきていた。

そして海上は大学二年の夏、思い切つて大学を辞めると、東京に出て、そこでプロのミュージシャンを目指す決意を固めた。

海上はそのことを柏原に報告しようと思つて、その日、実に五年ぶりくらいに柏原の家を訪ねていったのだった。

海上が柏原の家を訪ねていくと、柏原だけでなく、柏原の両親も久しぶりに訪ねて来た海上のことを歓迎してくれた。海上がちよつ

と寄っただけだからと断っても、海上のために手料理を振舞ってくれ、せっかくだから泊まっていけとまで言ってくれた。

海上としては自分が東京に行くことにしたことだけを報告して帰るつもりだったのだが、結局、帰りにくくなってしまう、その日は柏原の家に泊まることになってしまった。まあ、こうして柏原とゆつくり話をする機会もこれからさきそう滅多にないだろうし、まあいいかと海上も思い直した。

その日の夜は、いつか子供の頃に泊まりにきたときもそうしたように、柏原と一緒にテレビゲームをやったり、漫画を読んだりして時間を過ごした。

そしてだいぶ夜も更けてくると、柏原はちよつと眠くなってきたと言って、布団のうえに横になった。

海上も柏原のお母さんが用意してくれた布団のうえに横になった。

部屋の電気を消すと、部屋のなかは真っ暗になった。しばらくして目が暗闇に慣れてくると、青白い月明かりの光が静かに部屋を照らしているのがわかった。どこか不自然な感じがするほど、その日は月の光の明るい夜だった。

海上が布団の上から起きだして部屋のカーテンをあけてみると、そこには淡く透き通った、きれいな黄色い光を放つ満月が見えていた。

実は自分は幼い頃、月の見える夜が怖かったのだ、と、静かな口調で柏原が語りはじめたのは、部屋のなかで静まり返って、柏原が

もう眠ってしまったのかと海上が思ったときのことだった。

まだ起きてたんだ、と、海上が意外に思ってたと言った、せっかく友達遊びにきてくれているというのにこのまま眠ってしまうのはもったいなくて、と、柏原は笑って答えた。

そっか、と、海上は柏原の科白に微笑して頷くと、それから柏原に話の続きを促した。なんで月の夜が子供の頃は怖かったのか、と。

すると、柏原は苦笑するように笑って、それは子供の頃に見たテレビ番組のせいなのだ、と、話はじめた。

月の光を見た人間が狼男に変身してしまうという映画かドラマを昔テレビで見ている、その番組を見て以来、ひよつとすると、自分も月の光を見ると狼男に変身してしまうんじゃないかと恐ろしくなってしまうのだ、と、柏原は話した。

海上が柏原の奇妙な告白に可笑しくなって笑い声を上げると、つられるようにして柏原も少し笑って、でも、実際に、狼男にこそならなかったけど、ある日の夜、月の光を見ていたら急に頭がわれるように痛みだして、そのあと自分はいまの病気にかかってしまったのだ、と、柏原は語った。

海上が柏原の話にどう答えているのかわからずに曖昧に相槌を打つと、柏原はわずかなあいだ黙っていてから、やがて、自分はもうあと何年も生きられないだろうと思うとポツリと言った。

海上がそんなこと言うなよと言った、柏原は力なく小さく笑って、でも、ほんとに自分の死期が近づいてきているのがただわかるのだと柏原は言った。

海上はそんな柏原の科白に対して、そんなことはない、実際に体調だってよくなってきているし、現に退院だっしてしているじゃないか、と言った。

すると、柏原はたぶんこれは単なる一時的なものだと思うと言った。しばらくしたらまた悪くなると思うし、今度はもっとすごく悪くなる予感がする、と。

なんでそんなこと言うんだよ、と、海上はちよつと苛立って言った。どうしてそんなふうにネガティブに考えるんだよ、と、海上は友人を責めた。昔は病気で辛くてもそんなことは言わなかったじゃないか、と。

海上の言葉に、柏原は自分はべつにネガティブになっているわけじゃない、と、答えた。ただ事実をそのまま伝えているだけだ、と言った。自分はべつに生きる気力を失っているわけじゃないし、投げやりな気持ちになっているわけでもない、と柏原は言った。

ただ、自分はほんとにいつ死んでしまってもおかしくない状態だから、そのまえにきちんと海上にお礼が言っておきたいのだ、と、柏原は語った。

中学生のとき、自分がクラスの人間にいじめられているときにかばってくれて感謝していると柏原は告げた。中学を卒業してからも入院している自分をときどき訪ねてきてくれて嬉しかったと照れ臭そうに柏原は言った。

海上はそんな柏原の科白に黙って耳を傾けていた。

最後、柏原は東京にいつても頑張れよと言った。俺はお前が東京で成功することを祈っているし、俺はこっちで生きるために頑張るから、と。

それから柏原はふと窓の方に視線を向けると、でも、今日はほんとに月がきれいだなとどこか哀しそうな瞳で月を見つめて言った。

そのあと海上と柏原は布団のうえに横になりながら思い出話のよなことを少し話した。しばらくして柏原の声が聞こえなくなったなと思つて海上が柏原の方を振り返ってみると、
柏原いつの間にか眠ってしまった。

第八話

柏原の死に顔は、その日の夜と同じように静かで清らかだった。まるでぐっすりと熟睡しているうちに死んでしまったという感じだった。

海上は棺桶に入れられた柏原の顔を見てはじめて、柏原がもう死んでしまったのだということが理解できた。そのときになってやっと始めて友人を失ってしまったのだという激しい喪失感がこみ上げてきた。

気がつくくと、海上は自分でも知らないうちに涙を零してしまっていた。

母親から電話があった次の日の朝、海上は一着しか持っていないスーツを着て実家のある千葉に帰った。そしてそのまま海上は柏原の葬式が行われている柏原の実家に向かった。

海上が柏原の実家を訪ねていくと、柏原のお母さんはわざわざ遠いところを訪ねてきてくれてありがとうと感謝の言葉を述べた。そして柏原のお母さんは、柏原が最後、ほとんど苦しむこともなく他界したことを海上に教えてくれた。

柏原はあの月夜の夜、自分でも予言した通り、海上が東京にいつても間もなくまた体調を崩した。それまでは病院と実家を行ったりきたりする生活を送っていたのだが、その日を境に、もう、柏原が実家に戻ることはなかった。

海上は東京に行つてからもだいたい三ヶ月に一度くらいは地元
千葉に戻り、友人の入院している病院を訪ねていった。

海上が病院を訪ねていくと、柏原は自分の方が病気で苦しいはず
なのに、色々と海上のことを気遣つてくれた。東京で元気でやつて
いるか、とか、上手いかわないことがあつても頑張れよ、と。

海上は自分の方が励まなさなければならぬ立場にあるのに、い
つも逆に柏原の言葉に勇気付けられたりすることになった。

柏原の様態が本格的に悪化したのは、柏原が二十五歳のときだつ
た。

眠つていた柏原は突然苦しみ出すと、そのまま意識を失い、二週
間ちかくのあいだを生死彷徨うことになった。

どうにか一命は取り留めたものの、その後、柏原は定期的に発作
を起こして意識を失うようになった。回復したと思つても、またす
ぐに様態は悪化した。

海上が一番最後に帰省した十月のときも、柏原は例によつて意識
不明の重体から回復したばかりだった。身体中にいつくもの管を通
さて苦しそうに横になつている柏原は側で見えていて痛々しいくらい
だった。

しかし、それでも柏原はいつもの明るさを失わず、海上が心配し
て声をかけると、柏原は大丈夫だと笑つて答え、それよりお前の方
は大丈夫なのかと逆に海上のことを案じてくれさえした。頑張つて
音楽は続けているのか、と。

その後、柏原は小康状態が続いていて比較的体調も良さそうにしていたらしいのだが、つい先日、眠っているときにまた発作がはじまり、そのまま意識を失った柏原はもう二度と目を覚ますことはなかったらしい。

海上は柏原のお母さんからそんな報告を受けながら、せめて最後に柏原が死んでしまうとき、どうして自分は柏原の側についてあげられなかったのだろうと悔しかった。自分はあれほど柏原から励まされたり、勇気付けられたりしたというのに。

海上がそう言うと、柏原のお母さんは悲壮な笑みを浮かべて、そんなことは気にしなくていいと言った。あの子は定期的にあなたが訪ねてきてくれることをとても喜んでいたし、それだけで十分だと、柏原のお母さんは語った。

それにあの子はもうそろそろ楽になっても良い頃だったと思うのと柏原のお母さんは続けて言った。あの子はもう十分すぎるほど苦しんだし、もう十分すぎるほど生きるために頑張ったと思う、と。あの子を褒めてあげたいと思う、と、柏原のお母さんは涙を堪えて静かに微笑んで言った。

柏原の亡骸は霊柩車に乗せられて火葬場に行き、そこで灰になった。

火葬場まで一緒についていった海上は柏原の遺骨を見せてもらったのだが、それはとても白くて、とても穏やかで、まるで柏原の精神そのもののように海上には思えた。

柏原の葬式があったその日の夜は海上は実家に泊まり、翌朝になってひとりでもた東京に戻った。

帰りの電車のなかで海上はずっと柏原のことを考え続けた。柏原と話したことや、柏原が教えてくれたこと。

天気はよく晴れていてきれいな青空が電車の窓の外には見えていた。窓から差し込んでくる冬の澄んだ穏やかな光を浴びていると、柏原が死んでしまったなんてとても信じられないような気持ちになつてくる。ついさっきまで自分は眠っていてそれで悪い夢でも見ていたんじゃないかと。

だけど、でも、間違いなく、柏原は死んでしまったのだった。

最終話

東京のアパートに帰りついたのはもう昼過ぎだった。

海上がアパートに向かって歩いていくと、自分の部屋のドアの前で誰かが蹲っているのが見えてきた。誰だろうと思ってよく見てみると、それは直美だった。

直美は海上が歩いてくるのに気がつくのと、蹲っていた態勢から立ち上がり、微笑んで海上の顔を見つめた。

こんなところでなにやってるの、と、海上が不思議に思って尋ねると、直美は苦笑して、家をでていくときに合鍵を持っていくのを忘れちゃったのよ、と、いいわけするように答えた。

ほんとうは海上のケータイに電話しようかとも思ったのだが、なんとなく、このままずっと海上が帰ってくるのを待ってしようと思っただのだ、と、直美は話した。

どう答えたらいいのかわからなかったので、そっか、と、海上は曖昧に頷いた。

少しの沈黙があつて、それから直美は口を開くと、この前はごめん、と、小さな声で謝った。

「あなたの音楽のことを悪く言うつもりはなかったの。でも、ちょっとあのときはカアって頭に血が上っちゃって」

そんなことだったら気にしなくていい、と、海上は笑って答えた。俺もたかがCD一枚くらいでムキになったりして悪かった、と、海

上は直美に謝罪した。

海上がそう言うのと、直美は何も言わずに微笑んで、それから海上に黄色の袋にはいったものを手渡した。なんだろうと思つて海上が見てみると、

「それ、わたしがこの前割っちゃったCD。ちゃんと弁償したからね。それからおまけのCDもつけといた」

直美はそう言うのと、少し笑つた。

べつに弁償なんてしなくて良かったのにと笑いながら、海上は渡された袋を受け取つた。

海上が柏原の死について話したのは、部屋に入って少し経つてからだった。

海上は直美がいれてくれたインスタントのコーヒーを啜りながら、実は昨日、自分は幼馴染のお葬式にいつていたのだ、と、話した。

すると、直美は海上の顔をじつと見つめた。海上のあまりにも突然な告白に声を失つてしまつていようだった。

それから、海上は直美に柏原のことについて話して聞かせた。柏原がまだ幼い頃に重い病気にかかつてしまったこと。それでも明るさを失わずにこれまで懸命に生きてきたこと。

海上が話し終わると、直美は「そっか」と頷いただけで何も言わなかった。黙つて柏原の死について何か考えている様子だった。

海上はしばらくのあいだ黙っていてから、でも、俺は柏原のことをかわいそうとか、そんなふうには思いたくないんだ、と、言った。そう言うとき、直美は俯けていた顔をあげて、不思議そうに海上の顔を見つめた。

「確かにまだ二十七歳とかそんな若さで死んでしまった柏原はかわいそうかもしれないけど、でも、俺はあいつはあいつりになりもう一生懸命に頑張ったって思うんだ」
と、海上は言った。

だから、俺は柏原は病気に負けてしまったわけじゃないと思いたいのだ、と、海上は続けて言った。柏原は自分にできることを精一杯やって、それで彼なりに何かをやりと遂げて死んでいったのだと思いたいのだと海上は直美に話した。

すると、直美はしばらくのあいだ海上の言ったことについて考えるように黙っていてから、やがて、「そうね」と、少し寂しそうに微笑んで頷いた。

今、海上は井の頭公園のベンチにギターを持って座っている。冬の冷たい風が吹いていて、かなり肌寒い。

今日は月に一度の恒例の飲み会があった日だった。今はその飲み会が終わって、始発電車を待つために例によっていつもの公園でみんなが時間を潰しているところだ。

海上は飲み会に行くときギターを持参していった。みんなはどう

して海上がギターを持っているのかと不思議だったが、実はこのあとみんなに新曲を聞いてもらいたいと思っっているのだと告げるのは恥ずかしかつたので、ついさっきまでスタジオで練習していたからと咄嗟に嘘をついた。

海上はみんなと一緒に飲み屋から公園に移動したあと、ベンチに腰を下ろすと、さりげなくギターケースのなかからギターを取り出すと手に持った。

寒さで手がかじかんでしまつてちゃんと演奏できるかいまひとつ自信がなかったが、それでもせつかくの機会なので無理でも弾いてみようと思つた。

「何か弾くんですか？」

と、海上がギターの調弦をやっていると、山本ゆかりが興味をひかれたように微笑みながら尋ねてきた。

海上はゆかりの間に曖昧に微笑してちよつとねと答えると、

「はい、みんな集合」

と、照れ隠しのためにおどけた口調で言つた。

海上のかけた号令に、思い思いの場所にちらばっていたみんながどうしたのだろうと集まつてくる。

「なにか弾くの？」

と、東海林良美がコートのポケットに手をつっ込んでゆかりがしたのと同じ質問をした。

「もしかして弾きがたりとかしてくれるんですか？」

と、良美のとなりにはいた松田祥子が明るい声で言つた。

海上はふたりの間には何も答えずに、みんなそこに並んで、と、

言った。みんなこれから何がはじまるのだろうと言葉をささやきながら海上に指示されたとおりに並んだ。

海上はわざともったいぶって間をあけると、

「えー、じゃあ、今日これから新曲を発表したいと思います」

と、海上は宣言した。

海上のコメントにみんな弾んだ声を出したり、笑ったりした。

「楽しみー!!」

と、酔っ払った中平が近所迷惑になるような大声を出した。

「ちょっとそこ静かにして」

と、海上は笑って中平を注意すると、

「えーと、今年ももう少して終わりだし、来年、みんながいい年を迎えられるようにと思って、この日のためにちょっと新曲なんかを作ってみました。良かったらきいてやってください」

今日は十二月三十日で、あともう一日で今年も終わりだ。来年はどんな年になるのだろうと海上は思う。

「前置きはいいから早く!」

と、酔っ払った中平がまた大声を出した。

海上は苦笑すると、改めてギターを待ちなおし、ギターの弦を指で押さえた。高校のとき生まれてはじめて体育館のステージで歌ったときみたいにすごく緊張する。海上は大きく息を吸って、吐き出した。吐き出した息は、寒さのせいで吐き出した息の形に凍りつく。

海上はみんなの顔を一瞥すると、ちょっと躊躇ってから歌いはじめた。

今回の新曲は、いつもの激しい曲調とは違って、静かめの曲になった。少し哀しくて、だけど、優しい歌。たとえば祈りや願いのよ

うな。それそのものでは直接誰かを救うことも、何かを変えることもできないけれど、でも、その歌を聴いたひとの心を暖め、希望へと誘うことができる歌。果たして作者の意図通りにこの曲が聞く人に届くかどうかはわからなかったけれど、それでも可能な限り、海上は心を込めて丁寧に歌った。

海上がこの曲を完成させたのは、柏原の葬式から東京に戻ってきたその日の夜だった。その日、海上は眠ろうと思ったのだが、なかなか寝付くことができず、諦めた海上は新曲作りに挑戦してみることにした。すると、自分でも思いがけず、柏原が曲作りを手伝ってくれたかのように比較的簡単に新しい曲を作ることができた。

海上は柏原がそうしたように、精一杯もがいてみようと思いついた。最後まで。往生際悪く。自分が今一番やりたいと思っっていることは音楽を作ることだ。だから、そのことを最後まで続けてみようと思った。たとえこのさき誰からも認められなくて、無駄な努力だとバカにされて、笑われたとしても。もっと歳をとっておじさんになっても音楽にしがみついて滑稽に生きてやろうと海上は開き直った。

ギター一本あればホームレスになっただって音楽を続けていくことはできるはずだ。実際にそんなふうには思い続けられるかどうかはわからないけど、少なくとも今は諦めることは間違っただことのように思えた。

海上は希望は信じてみたいと強く思った。

曲が、もうすぐ終わろうとしている。ふと夜空に視線を向けてみると、夜空に片隅に月が浮かんでいるのが見えた。その月を見つめながら、海上は死んでしまった友達のことを思い、これからの明日を思った。

曲が終わると、ギャラリィから暖かい拍手と喝采が起こった。海上は片手をあげて声援に答えると、

「みんな愛してる」と、ふざけて言った。

海上の科白にみんなが可笑しそうに声をあげて笑った。

海上はもう一度友達の姿を探し求めように空を仰いだ。

夜空は冷たく透き通った青色に染まっている。まるで夜空の内側から新しい朝が透けて見えるかのようだ。そしてそんな朝の光と夜の暗闇が静かに溶け合う空の端で、月は、物静かに、どこか微笑みかけるようにそっと光を放っていた。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2669d/>

月夜の夜にきみが僕に話したこと

2009年3月24日09時48分発行